



学校だより

神橋

令和元年 9 月 27 日
横浜市立神橋小学校

10 月号



No SIDE(ノーサイド)の精神

校長 末松 隆一郎

街のそこかしこで秋桜の花が優しく揺れ、曼殊沙華の赤鮮やかに映える中、茅蝸(ひぐらし)もかなかなかと去り行く頃となりました。「神橋ふれあい運動会」を直前に控え、学校中から子ども達の元気な声が絶え間なく響いています。

日本代表チーム初戦勝利で沸く中「ラグビーワールドカップ 2019」も開幕しました。11月2日に、横浜日産スタジアムで決勝戦が行われるまで、ますます盛り上がっていくことと思います。決勝の日、決戦の地横浜の舞台に、「桜の戦士」達が勝ち進んでくれることを願わずにはられません。

「ここでノーサイド！」ラグビーの中継を見ていると、試合終了の瞬間、このような言葉を必ず耳にします。野球やサッカーなど他のスポーツでは、「試合終了」とか「ゲームセット」という言葉を普通は使っていますが、ラグビーだけ、なぜ「ノーサイド」というのでしょうか。

この言葉は、試合が終わった瞬間、「試合が終われば、勝った側(SIDE)も負けた側(SIDE)もない(No)」という意味です。私は、この言葉の精神が好きで、「ノーサイドの精神、それは互いの体を潰し合うほどの激しいスポーツならではの、いい言葉だなあ。」と自分なりの解釈をしていました。ところが調べてみると、この言葉を使っているのは、現在日本だけだそうです。ラグビーの本場イングランドでも、1970年代ぐらいまでは使われていたそうですが、今は世界的にも試合終了は「FULL TIME」が一般的だそうです。日本以外では「ノーサイド」は、もはや死語になっているとのこと。

ではどうして日本だけこの言葉が今なお残っているのでしょうか。理由は定かではありませんが、そこには、「礼に始まり礼に終わる」、脈々と受け継がれてきた美しき伝統と礼法、そして、「敗者への敬意」という武士道に通ずる精神が、この国のスポーツマンシップの根底にあるからなのではないかと私は思います。ワールドカップ初戦でロシアに勝利した後、日本代表キャプテンのリーチ・マイケル主将は、ロシアチームのロッカールームを訪れ試合の健闘を讃えた後、日本刀をプレゼントしたそうです。



「全力で戦った相手には敬意を示す。それが敗者であっても、その名誉は必ず守る。」

運動会、それはスポーツの祭典である以上、必ず勝ち負けがあります。赤組、青組、黄組に分かれ、子ども達一人一人、代表リレー選手、応援団、金管クラブ・・・、チームの勝利を目指して毎日一生懸命練習に励んでいます。当日の結果発表、喜びに歓喜する子、悔し涙を流す子、それは非情な結果とも言えますが、同時に、「全力で頑張ってきた、そして戦いぬいた」証(あかし)でもあります。どのチームも、全力で戦った相手チームに敬意を示し、互いに名誉を守り合う、そんな「No SIDE」の精神に溢れた「神橋ふれあい運動会」であってほしいと思います。